

都道府県・指定都市番号	22	都道府県・指定都市名	静岡県	研究課題番号・校種名	3 (4) 中学校
				領域名	E S D
研究課題	学校全体で取り組む課題 (4) E S D を学校全体で体系的に推進するための教育課程の編成, 指導方法等の工夫改善に関する実践研究				
学校名 (児童・生徒数)	磐田市立豊田中学校 (390 人)				
所在地 (電話番号)	〒438-0804 静岡県磐田市加茂 243 (TEL 0538-32-4637)				
研究内容等掲載ウェブサイト URL	http://toyoda-j.city-iwata.ed.jp/				
研究のキーワード 「志」, 授業づくり, 志づくり, 仲間づくり, 教科の本質と教育活動の価値付け					
研究結果のポイント ○ 教科間の横断的なつながりや教科と社会の形成との関わりに目を向けた授業づくりにより, 学びに対する意義や価値を感じさせることができた。 ○ 仲間づくりの取組により, 所属意識や自己有用感が保たれ, 「かかわる力」が醸成した。 ○ 「志タイム」の取組により, 未来や社会に思いを巡らせることが増えたり, 未来を担っていかうという意志が芽生えたりした。					

1 研究主題等

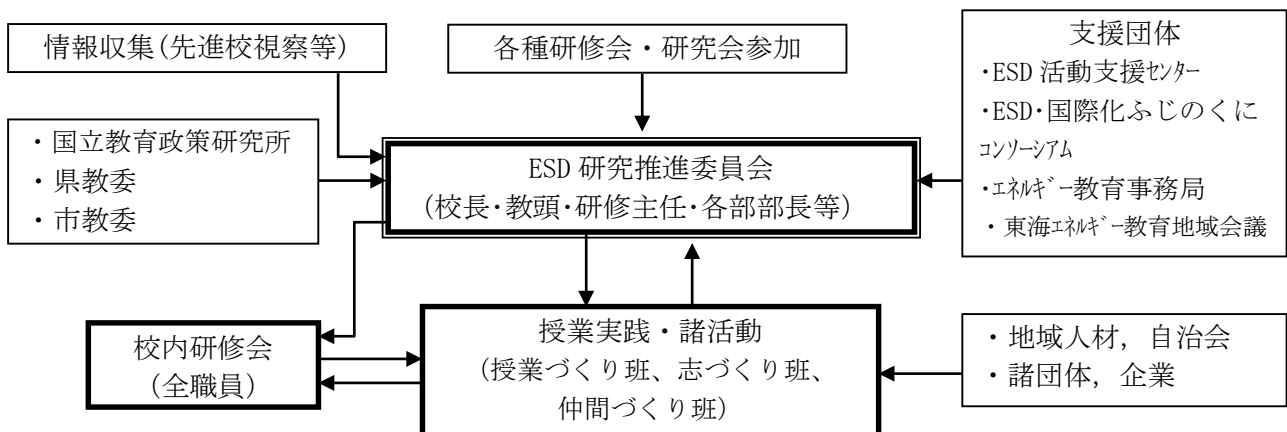
(1) 研究主題

未来につながる, 世界に広がる志をもった生徒の育成

(2) 研究主題設定の理由

本校生徒の課題として, 欠席率の改善や困難に立ち向かう気力の涵養等が挙げられる。数年来, 学校教育目標「志をもち, たくましく生き抜く生徒の育成」の下, キャリア教育を基盤とした教育活動を行ってきたが, 大きな成果が得られていないという現状があった。そこで, E S D の視点を取り入れ, 教科指導や総合的な学習の時間, 特別活動等を再構築することで, 自己を取り巻く全ての教育活動が未来や社会につながることを実感させたいと考えた。それにより, 学習や活動の意義や価値を理解できれば, 主体的な学びや多角的な見方・考え方を身に付けられると共に, 生徒一人一人のもつ「志」が広い視野に立った高いものとなり, 複雑で変化の激しい社会を生き抜くたくましさへと結び付くと期待できると考えた。これにより, 本研究主題を設定した。

(3) 研究体制



(4) 2年間の主な取組

平成 29 年度	4月	研究体制づくり，平成28年度末の質問紙調査の分析，校内研修①（研究構想・計画提案）
	5月	E S Dカレンダー作成①，提案授業（2年国語「モアイは語る―地球の未来」）
	6月	校内研修②（授業公開，講義：国立教育政策研究所 野内頼一調査官） 総合的な学習の時間（2年「未来授業」，1年「ようこそ先輩」）
	7月	質問紙調査① 総合的な学習の時間（3年「地域貢献活動」）
	8月	校内研修③（質問紙調査①の分析，講義：天城中学校 前校長 大塚明氏） 教科部会（教科キャッチフレーズ作成，2学期の教材研究）
	9月	E S Dカレンダー作成②
	10月	ながふじ学府全体会（校内研修④：公開授業，分科会） 「ちゃんと見」授業公開（一人一授業研究）前半 総合的な学習の時間（1・3年「先輩授業」，2年「職場体験」，3年「上級学校見学」）
	11月	エコツアー（エコタウン見学） 「ちゃんと見」授業公開（一人一授業研究）後半 環境教育実践力強化研修参加（E S Dカレンダー作りを通じたカリキュラム・マネジメント等） 校内研修⑤（プチ模擬授業，教科ガイダンス演示，教科キャッチフレーズ検討） 質問紙調査②
	12月	質問紙調査②の分析
	1月	校内研修⑥（E S Dカレンダー暫定版の完成，平成29年度の成果と課題の検証）
2月	国立教育政策研究所教育課程研究センター関係指定事業研究協議会（発表・協議）	
3月	質問紙調査③，質問紙調査③の分析	
平成 30 年度	4月	校内研修①（研究構想・計画提案） 教科キャッチフレーズの再検討，ガイダンス資料作成・活用
	5月	校内研修②提案授業（3年国語・美術コラボ授業「美しき文字の旅」），研究協議
	6月	地域支援課訪問（授業公開，研究協議） 総合的な学習の時間（2年「未来授業」，1年「ようこそ先輩」，3年「地域貢献活動」）
	7月	校内研修③（コラボ授業計画） 質問紙調査①
	8月	校内研修④（質問紙調査①の分析，講義・演習：多摩市立連光寺小学校長 棚橋乾氏）
	9月	校内研修⑤（新学習指導要領全面実施に向けた伝達研修，コラボ授業のための教科部会） コラボ授業公開（一人一授業研究 ～11月）
	10月	ながふじ学府全体会（校内研修⑥：公開授業，分科会） 総合的な学習の時間（1年「地域探訪」，2年「職場体験」，3年「上級学校見学」）
	11月	質問紙調査② 総合的な学習の時間（1・3年「先輩授業」） 校内研修⑦（質問紙調査②の分析，1～2学期の教育実践報告）
	12月	エコツアー
	1月	校内研修⑧（平成30年度の成果と課題の検証）
2月	国立教育政策研究所教育課程研究センター関係指定事業研究協議会（発表・協議） 質問紙調査③（予定）	

※ 上記の取組に加え，鉄人遠足，体育大会，合唱コンクール，芸術鑑賞会，生徒会活動における「ピンクシャツデー」や「服の“チカラ”プロジェクト」，「福島ひまわり里親プロジェクト」等を実施した。

2 研究内容及び具体的な研究活動

(1) 研究内容

① 授業づくり

- ・ 各教科を学ぶ意義をE S Dの視点から再評価し，ガイダンス機能を充実させたり，異教科や実社会との関連を意識した授業を構想したりする。
- ・ 教科の学習過程において，本校の定める「志を実現する力」を育成する手立てを盛り込んだ授業を構想する。

② 志づくり

総合的な学習の時間において，地域貢献活動や職場体験等を充実させ，社会とのつながりを学んだり自己を見つめたりすることを通し，夢や志を育む。

③ 仲間づくり

学級や学校への所属意識を高め、ともに同じ意識を持って行動することの素晴らしさを体験させる。その絆が学級や学校に留まらず、広く世界とつながることへの期待感や視野の広がりにつなげ、より深く広い仲間意識を醸成する。

(2) 具体的な研究活動

① 授業づくり

ア 「志を実現する力」を育成する授業のデザイン

「志を実現する力（かかわる力・見つめる力・やりぬく力・かなえる力）」と各教科・領域で身に付けさせたい力との「資質・能力のつながり」を踏まえて、「つかむ」「見通す」「追究する」「まとめる」「振り返る」の課題解決型の学習をデザインすることで、学習の広まり・深まり・高まりや意欲・課題の更新につなげられる授業を目指した。

イ 教科ガイダンスの実施（平成 30 年度から）

生徒が、学ぶことと社会や未来とのつながりを見通し、教科の本質や学習の意義を知ることにより授業に主体的に臨む意欲を高められるよう、各教科の「なぜ学ぶのか」という本質を押さえた「教科キャッチフレーズ」を考案した。そのキャッチフレーズと学習内容や単元・教材との関連をつかむためのガイダンスを、授業開きや単元の導入時に実施した。

ウ 「コラボ授業」の実施（平成 30 年度から）

教科キャッチフレーズに示した教科の本質を実感させることができる「未来や社会につながる学び」の具現化の方法として、人材の活用や教科横断的な授業の実践を進めた。各教科の学習が、その教材や本時の授業だけで完結するものではなく、互いに関わり合って社会の形成や自分の将来につながっていることに生徒が気付けるよう、複数の指導者の連携によって授業を構想し、実践した。授業構想の際には、教科や領域を連携させ総合的（横断的）に構成し、各教科・領域同士の学習内容のつながりを共有するためのツールとして「ESDカレンダー」を活用した。

コラボ授業の形態

○ 教科横断的コラボ

異教科同士を関連付けた授業。

○ 外部人材とのコラボ

校外に存在する材と学習内容を関連付けた授業。

○ 異年齢集団とのコラボ

同一教科の学習内容や身に付けさせたい力の系統性を踏まえ、異年齢集団を関わらせる授業。

② 志づくり

志を、「常に心掛け、大切にしている信条」「短期的な目標や将来目指す姿」「創りたい未来・社会像」と定義付け、総合的な学習の時間「志タイム」で、1年「志とは何かを知る」、2年「志を立てる」、3年「志を実現する」をテーマとし、体験学習に重点を置いた探究を行った。

地域人材や諸団体の活動等を活用することで、生徒が自分と社会とのつながりを知ったり、あるべき未来の姿、自分の生き方を考えたりする機会を数多く設定した。また、体験を通して気付いたことや学んだことを伝え合う場を設け、思いを共有したり内省したりすることを大切に。2年生は「立志の式」で自らの志を表明し、3年生は自分たちの志を具現化するものとして「地域貢献活動」を行ったり、「先輩授業」という形で自身の志や「志タイム」をはじめ中学校生活全般で学んだこと・考えたことを後輩に発信・提言したりした。

③ 仲間づくり

鉄人遠足や体育大会、合唱コンクールなどの校内行事を通し、励まし合って目標を達成することの尊さや同じ意識をもって行動することの素晴らしさを体験させ、学級や学校への所属意識を高めた。また、生徒会活動として、民間の「服の“チカラ”プロジェクト」や「福島ひまわり里親プロジェクト」に参加し、持続可能な社会の担い手として社会貢献への意識を高めたり、自己有用感を醸成したりすることを目指した。

(3) PDCAサイクルへの取組について

学期ごとに質問紙による 10 項目調査を実施した。特に肯定的評価の数値の変容に注目して分析し、その原因や改善のための方策を考察し、次学期の実践に結び付けた。平成 30 年度には、「以前に比べ、未来のことや社会のことについて考えるようになった」を特設し、そのきっかけや理由も合わせて調査し、生徒への支援の参考とした。

肯定的評価の割合（「そう思う」「大体そう思う」）

	1年時	2年時			3年時	
	H29.3	H29.7	H29.11	H30.3	H30.7	H30.11
学校が楽しい	86%	87%	85%	83%	89%	92%
みんなで何かをするのは楽しい	94%	90%	88%	85%	91%	96%
授業に主体的に取り組んでいる	73%	77%	70%	73%	83%	80%
授業がよく分かる	73%	73%	72%	70%	75%	71%
他者の意見を踏まえてよりよい意見を考えている	72%	76%	69%	80%	78%	76%
身の回りの出来事を様々な側面や立場から考えている	76%	79%	70%	84%	78%	80%
地域のことに進んで参加している	81%	78%	88%	75%	80%	81%
社会がどうなるとよいかいろいろと考えている	60%	57%	55%	61%	66%	65%
人の役に立ったり、人に喜んでもらえたりすることは嬉しい	94%	94%	90%	93%	94%	93%
自分なりの志をもっている	79%	81%	68%	85%	88%	86%
未来のことや社会のことについて考えるようになった					77%	90%

質問紙調査 現3年生の推移（平成28年度3月～平成30年度11月）

3 研究の成果と課題（○成果●課題）

- 「コラボ授業」を導入したことで、初年度の課題であったESDカレンダーを生かした柔軟なカリキュラム・マネジメントが一步進んだ。教科間の横断的なつながりや教科と社会の形成との関わりに目を向け、指導内容の配列を組み替えたり、指導者の専門性を生かしたりしたダイナミックな実践が行われた。生徒の授業に対する主体性が向上しているのは、それらの取組により学びに対する意義や価値を感じさせることができたからだと考えられる。
- 調査項目「学校が楽しい」「みんなで何かをするのは楽しい」「人の役に立ったり、人に喜んでもらえたりすることは嬉しい」は、肯定的評価をする生徒の割合が著しく多い。仲間づくりにおける取組により、所属意識や自己有用感が保たれていると言える。
- 調査項目「社会がどのようになるとよいかいろいろと考えている」は、どの学年においても他の項目に比べ低い数値であるが、生徒がこの内容を大変高次なことと捉えていると考えられる。「未来のことや社会のことについて考えるようになった」の数値の伸びからは、「志タイム」の取組により、未来や社会に思いを巡らせることが増えたり、未来を担っていこうという意志が芽生えたりしてきていることがうかがえる。
- 2年間の質問紙調査から、2年生時に各項目の肯定的評価が下降する傾向があると分かった。発達段階における情意面の変化やメタ認知力の向上などが原因として考えられるが、それは学校生活への意欲の減退にもつながる。本研究の動機でもある欠席率の改善や困難に立ち向かう気力の涵養といった課題を実現するためにも、2年生時の「授業づくり」「志づくり」「仲間づくり」における取組の工夫や支援の在り方の改善を図る必要がある。
- 「コラボ授業」をはじめ、「志づくり」や「仲間づくり」における諸活動において、複数の指導者が関わったり、外部の団体や人材を活用したりする取組が多岐に渡ったため、日課変更や時間割の組換が必要なことが多く、発達障害を抱える生徒への影響等が心配された。
- 教師主導のプロジェクトが多く、生徒が受け身になりがちであった。生徒の思いを出発点とした活動、生徒の疑問や気付きを出発点とした課題解決型の授業を構築する工夫が必要である。
- 質問紙調査において情意的な面は高い評価が出ているが、実践力としては、弱さがある。SDGsを教育活動に関連付けていくことも視野に入れたい。

4 今後の取組

- 年度当初に教育課程との有機的なつながりをもたせた「コラボ授業」を計画する。
- 生徒の気付きや疑問を出発点とした課題解決型の授業づくりの推進をする。
- ESDをホールスクールで進めるための機能的な組織づくりを検討する。
- 諸活動の目的や意義を共有し、マンネリ化を防ぐと共に、生徒の実態等に合わせて精選する。